

[論 文]

オランダ学校教育の現状と課題

－「涙と笑いのハッピークラス」はどう受け止められたか－

A School Education in the Netherlands

－How Dutch People Regard the Documentary “Children Full of Life”－

辻 直人*1 金森俊朗*2

Abstract

Both authors of this article were invited to the Netherlands by an educational NPO, NIVOZ. The main purpose of this invitation was for Professor Kanamori to give some lectures and lessons to the Dutch audience; however, we could also visit some elementary and secondary schools, and talk with children and teachers. The education system in the Netherlands is often described in Japan as one of the best in the world, but through this trip we found that even Dutch school education has a lot of problems. The documentary film called 'Children Full of Life', which is the story of Professor Kanamori's class of 4th grade elementary school children in 2002, is well-known to Dutch people. They wanted to learn from Professor Kanamori to make Dutch education better. In this article, we report how the Dutch people regard the documentary. Through observation of their reaction to Professor Kanamori's lecture, we attempted to reveal what is happening in their educational system and how they want to change it.

キーワード：オランダ学校教育／「涙と笑いのハッピークラス」／教育哲学

はじめに (辻)

私たち筆者2名は、2012年9月2日より14日にかけて、オランダの民間教育団体NIVOZ（現地発音で「ニフォス」と読む、オランダ語でNederlands Instituut voor Onderwijs en Opvoedingszaken、英語でNetherlands Institute for Educational Matters）よりの招待で、オランダ各地で講演及び学校視察等を行う機会を得た。オランダの教育については、日本では理想的な教育として高く評価されている¹。しかし今回約10日間

の滞在でいくつかの学校を訪問し、教育関係者や講演参加者の声を聴くにつれ、オランダの教育事情も決してバラ色ばかりではない実態が浮かび上がってきた。そこで本稿では、今回のオランダ講演視察旅行を通して見えてきたオランダ学校教育の現状と現在抱えている課題について、一考してみたい。

考察を進めるに当たり、いくつかの検討事項を挙げておく。第一に、金森俊朗の2002年に受け持った小学校4年1組の1年間を追いかけたNHK制作のドキュメンタリー「涙と笑いのハッピークラス 4年1組命の授業（英語名 Children Full of Life）」がどのようにオランダで受け止められたかという点である。このドキュメンタリーは後述するように、国際テレビ賞を受賞したことがきっかけとなり世界各国で放映され、オランダでも広く視聴されている。今回金森がオランダに

招待されたのも、このドキュメンタリーが反響を呼んだからに他ならない。実際講演中も何度かこのドキュメンタリーの一部が上映され、その場面をめぐっての質疑応答が繰り広げられた。では、オランダ人にとってこのドキュメンタリーはどのように映ったのだろうか。彼らはこのドキュメンタリーの中に何を見出したのか、考えてみたい。

第二に、講演を通して聴衆から投げかけられた質問の分類検討から見えてくるオランダ学校教育の現状と、教育関係者が抱えている問題意識を明らかにしたい。数々の質問の背景には、彼らの日頃の教育に対する問題意識や疑問が潜んでおり、その対極的教育として金森実践を見ていたと考えられる。第三に、現地の学校を視察し、子どもとの交流、教師の仕事風景から見えてきたことについても触れておきたい。そして第四に、現地の新聞で今回のオランダ講演がどう報道されたか、記事内容についても触れたいと思う。

1. オランダに呼ばれた経緯、ドキュメンタリーの概略 (金森)

(1) 「涙と笑いのハッピークラス」

全ての起こりは、NHKスペシャル番組「子ども 輝けいのち」の第3集「涙と笑いのハッピークラス～4年1組 命の授業～」である。この番組は、筆者が担任していた金沢市立南小立野小学校4年1組の1年間（2002年度のほぼ全日）を撮影し、2003年5月11日（日）に放映されたものである。

視聴者からの高い評価を得て、その後何度も再放映された。同年秋に開催されたNHK主催、教育番組国際コンクールで「グランプリ日本賞」を受賞。さらに、世界の40カ国と地域から、15部門900を超える番組の応募があったカナダバンフテレビ祭において、15部門を通じ最高の作品に贈られるグランプリ「グローバルテレビジョン・グランドプライズ」を受賞、同時にファミリー向け及び青少年番組部門の最優秀賞「ロッキー賞」を受賞した。

その番組の主な内容は以下の通り。

a、レンが手紙ノートに書いた祖母の死の悲しみを発表。たくさんの子の応答の中、ミフユは

これまで封印していた父の死を初めて級友に語る。悲しみの共有、共感を描く。（死の授業）

b、水源の森、源流探検で川に飛び込み遊ぶ子どもたち。自然の中で生きる輝きを描く。

c、算数と国語の授業。授業の重視を強調。

d、友を軽蔑する動きへの指導・・・いじめ初期への素早い対応。自分の醜さと向き合うことを強く求め、自分が噂を広め、止めることをしなかった弱さと対峙。

e、どしゃぶり泥んこサッカーに興ずる子どもたち。（bと同質）

f、大事な手紙ノートの発表中、しゃべっていたユウトにイカダを作り活動に参加させないと筆者が宣告。それに抗議をし、友を守ろうと必死になる子どもたち。筆者が完全敗北を宣言。

g、雪の中で遊ぶ子どもたち。転校生に学級が作詞・作曲の歌を創り、贈る。

h、個性人体図を描く子どもたち。

i、突然襲ったツバサの父の死を語る筆者、励ますために行動したり、手紙を書いた子どもたち。

「ゆっくりでいいからがんばって」と、自分の言葉を大切にする子どもたち。

j、学級の解散にあたって、父を失った子どもと「天国にいる父」にメッセージを贈る子どもたち。

筆者の口癖「生きるということは、仲間とつながることだ」「つながりの中で、自分らしいハッピーを創り出して！」を具体的にどのような指導で展開したのか、その中で子どもたちはどのように成長したのかを描いた番組である。

(2) オランダからの訪日と要請

世界的な二つの大賞を得た番組は、各国の言語に翻訳されて、教育界や映画界に視聴されたようである。その中でも最も強い関心をもった国がオランダだと考えられる。

2006年9月、オランダのマーセル夫妻が通訳の中川氏と共に金沢市立西南部小学校を訪れた。突然の訪問だったが、夏の休暇に日本を選んだ主要

*1 TSUJI, Naoto
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
教育学概論

*2 KANAMORI, Toshiro
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
社会科・生活科

な目的は筆者に会い、インタビューをするためだという。いろいろ聞かれたが記憶が定かなのは「あなたの教育哲学の源流、系譜は？」と「あなたは日本において少数派か多数派か？」という問いであった。

そこでオランダへの講演要請の打診はあったが、小学校教員や教育運動及び市民運動で多忙を極めていた筆者は即座に断った。彼は、オランダにおいて教師を指導する仕事に従事しているようようだが、当時筆者はその立場をよく理解できなかった。

この後（多分2010年頃）、オランダから映画祭を開催したく、その祭りの中心映画に「涙と笑いのハッピークラス」を上映したいので、オランダに来てほしいという要請を受けた。意味が十分に理解できず、また日本各地の講演要請で日程に余裕がなく断った。

ところが、2011年8月、イングリッドという女性が大学まで訪れ、オランダからの正式な招待状を持参し、オランダ各地において講演をして欲しいという要請を行った。贈られたマーセルが著した部厚い本の中に、筆者と「涙と笑いのハッピークラス」が紹介されていた。オランダ各地の学校で「涙と笑いのハッピークラス」が子ども、保護者に向けて視聴され、また教師の研修会においても積極的に視聴され、学びの対象になっているとのことであった。後は「あなたの教育哲学、ビジョンを直に聞き、学びたい」と説く彼女に筆者はついに断りきれず、訪蘭する約束をした。しかし、日本よりはるかに先進的な教育制度を持ち、自由な教育が展開されているオランダにおいて、真に筆者が必要とされているかどうか、訪蘭するまで悩み続けることになる。

訪蘭後、多少理解できたが、筆者を何としてもオランダに招きたいと考えたイングリッドは、それまで知己ではなかったマーセルに連絡をとった。マーセルは、教育・子育てをサポートする民間の大きな機関、NIVOZのリーダーである。彼は、その機関の会長ルーク・スティープンスを動かし、イングリッドと3人の相談の上、NIVOZが中心になって招聘することになったと言う。イングリッドは、同じ教育・子育てをサポートする民間機関Checkitin!に所属するが、極めて小さな組織であ

る。しかし、彼女は10日間に渡る講演や学校訪問の実務を中心的に担い、同時に筆者・辻と同じ宿舎に寝泊まりし、オランダ全土へ車を走らせ、全ての日程に付き添うという献身的な努力を払う。

ここにもオランダという国の教育界の特徴がよく表れている。日本のように国や自治体が教師の研修や支援を担う（実態はかなり強制的支配的な指導管理）のではなく、種々の民間機関が自由に、主体的に、積極的に研修や支援を担う。NIVOZは、その中でも大きな機関である。敷地に、本部、簡易ホテル、レストラン、バー、ホール、会議場、野外活動場を持っている。そこでは連日、研修会が開催されている。事務局長のニッケルは元弁護士で、多くの職員が働いている。

筆者を招いた中心メンバーは、教育現場における人間哲学、教育学（本質的な教育論・教師論）の衰退、貧困に危機意識を持っていた。教育現場及び教師と接点を持ち、だが対象化して客観的に見つめている彼等だからこそ募らせた危機意識であろう。筆者にそれらを強烈に求めたのであった。

求めているものが、「涙と笑いのハッピークラス」に具現化されていることに強い感動をもったことは確かである。さらに、その実践が世界的にも不登校・いじめ問題を始めとする子どもの生きづらさが突出しているにも拘わらず、学力向上主義と教師への管理統制に走る日本において、その流れに抗して実践創造に取り組む教師像に強く惹かれたようである。

2. 滞在日程及び活動内容について（辻）

9月2日に現地入りした私たちは、翌3日午後よりオランダをほぼ一周する講演旅行に出かけることになった。訪問した都市は15か所、12日までの10日間で行われた講演会は実に17回、他に学校視察及び子どもとの対話3回、中等学校（College）での授業3回、生徒のプレゼンテーション鑑賞及び生徒との懇談1回、研究者のインタビュー1回と、過密スケジュールに追われた。

また、土日の比較的自由な時間にアンネ・フランク・ハウス（アムステルダム）とシーボルト・ハウス（ライデン）を訪問できたことは、講演内容を豊かにし且つ教育の本質を考える上で重要な経験となった。

具体的なスケジュール、訪問場所は以下の通りである。なお、表中に「主催団体・施設等」とあるのは、オランダ各地で講演会等を実際に企画実施したのが、現地の教育研究団体ないし学校だからである。本稿冒頭で述べたNIVOZは私たちを

オランダに招待した団体であるが、各地の講演会企画についてはNIVOZが各団体に参加を呼び掛けたことで実施された。合計32もの教育団体や学校が今回の講演企画に関わっていたことを附言しておく。

表1 オランダ滞在日程

日付	都市名	主催団体名等	講演・視察場所	種類
2012/9/3	アルメロ (Almelo)	デ・ハーゲドールン小学校 (OBS de Hagedoorn)	アルメロ図書館	講演①
	ヘンゲロ (Hengelo)	Ouders & Onderwijs Twente	ヘンゲロ市庁舎	講演②
2012/9/4	ボックスメール (Boxmeer)	デ・ボンケルト小学校 (OBS de Bonckert)	同左	学校視察・ 子どもとの対話①
	アイントホーフェン (Eindhoven)	フォンティス職業大学 (Fontys Hogescholen)	同左	講演③
	同上	同上	同上	講演④
2012/9/5	ドリーベルゲン (Driebergen)	Besturenraad Academie	Landgoed De Horst (NIVOZ関連施設)	講演⑤
	ドリーベルゲン	NIVOZ	同上	Dutch Kanamoris との懇談・講演⑥
	ドリーベルゲン	同上	同上	講演⑦
2012/9/6	バーレンドレヒト (Barendrecht)	NTO Effect	ドクター・スカープマン・スクール (Dr.Schaepmanschool)	学校視察・ 子どもとの対話②
	リダーケルク (Ridderkerk)	同上	Hotel vd Valk	講演⑧
	ハーグ (Den Haag)	De Leerschool ism Karen de Juf en Paulien Stoffer	モンテーニュ高校 (De Leerschool Montaigne Lyceum)	講演⑨
2012/9/7	アムステルフェーン (Amstelveen)	Checkitin!	アムステルフェーン・カレッジ (Het Amstelveen College)	授業①
	同上	同上	同上	授業②
	アムステルダム (Amsterdam)	Rapucation	ピーテル・ニューランド・カレッジ (Pieter Nieuwland College)	生徒発表、懇談
	アムステルフェーン	Checkitin!	アムステルフェーン・カレッジ	講演⑩
	同上	同上	同上	いじめ劇鑑賞と講評

日付	都市名	主催団体名等	講演・視察場所	種類
2012/9/8	アムステルダム	オランダ心理療法学院 (Nederlandse Academie voor Psychotherapie)	同左	講演⑩
2012/9/10	アーネム (Arnhem)	Nowhere en Matters2	アーネム・ナイメーヘン職業大学 (Hogeschool Arnhem Nijmegen)	講演⑫
	ルールモンド (Roermond)	Irisz	オランジュリー・シアター・ホテル (Theater Hotel Oranjerie)	講演⑬
2012/9/11	ロッテルダム (Rotteldam)	ロッテルダム職業大学 (Hogeschool Rotteldam)	同左	講演⑭
	同上	コメニウス・カレッジ (Comenius College)	同左	授業③
	同上	同上	同上	講演⑮
2012/9/12	ヘーレンフェーン (Herenveen)	アトラス学園 (Educatief Kindcentrum de Atlas)	同左	学校視察・ 子どもとの対話③
	同上	同上	EKC Atlas近くの公会堂	講演⑯
	フローニンゲン (Groningen)	フローニンゲン・ハンゼ職業大学 (Hanze Hogeschool Groningen)	同左	研究者のインタビュー
	同上	同上	同上	授業④、講演⑰

講演に集まった聴衆は、教師、教員養成校の教員、保護者、学生などであった。講演の規模はどの会場も数百名が集まり、大盛況だった。それだけ、オランダ各地に「涙と笑いのハッピークラス」が知られており、金森俊朗の話聞きたいと思う人がたくさんいたとことである。総主催者NIVOZからの報告によれば、講演参加総数は4000人を超えたとする。

3. 講演等で受けた質問内容の分析(辻)

本項では、講演全体を通じて出された質問の傾向を分類し、その背後に潜むオランダ人の教育への問題意識を検討する。講演等を通してオランダ人参加者から尋ねられた質問内容を分類すると、大きく分けて4種類に分けることができる。すなわち、第一に「涙と笑いのハッピークラス」に関する質問、第二に金森俊朗の教育論の源泉についての質問、第三に現在の教育界に対する意見や現場教師や保護者へのアドバイス、そしてその他の

4種類である。以下、特徴的な質問内容について紹介しながら、オランダ教育界の現状を考察したい。

(1) オランダ学校教育に対する問題意識

いずれの講演会場でも、現代の教育問題に関する質問や、意見を聞きたいとの声が多く出された。オランダでも近年は政府から学力向上を重視する指導が学校に強まっているという。

最初の講演地アルメロにおいて、司会者から会場に投げかけられた質問が今のオランダ学校教育の実態と、それに対する教育者たちの問題意識を反映していた。いくつかあった質問の1つは「現代の教育では、教師と生徒の関係作りよりも成績向上の方が優先されているか」というものだった。

この問いかけに対し、聴衆のほとんどがYesを示す緑の札を掲げた。この質問と回答は注目に値する。オランダは自由で個性や学び合いを大切に教育風土と紹介されてきたが、聴衆の反応は、

現状はそうではなくなっていると感じている人が多いことを如実に表している。筆者(辻)の友人で20年前にオランダに住んだ経験のある人の話では、当時は宿題もなく、子どもは何も持たずに学校へ通っていた。鉛筆でさえも学校のものを使っていたそうである。こういう変化の背景には、国際競争力が世界規模で強く意識されるようになり、オランダの学校教育も例外なくその余波を受けているという現実があると指摘できるだろう。

また、学力向上に徹することが教育実践の中身を乏しくしているという考えを、多くのオランダの教師たちは持っているということも分かった。実際に学校を視察した時も、多くの児童が既成のドリルや教材を使って作業している姿が確認できた。そして、政府だけでなく保護者からも学力が要求され、年度の終わりには成績が上がっているかどうか問われるようである。

特に、金森ドキュメンタリーに見られるような命の授業に共感した人たちにとって、こうした人間を育てる教育、あるいは楽しい学びは、学力向上と相いれないと考えているようだった。この両者の対立が激しくなっている中で、多くのオランダ人が金森実践から学び、そこに答えを見つけようとしていたのであった。「涙と笑いのハッピークラス」がオランダで全国的に受け入れられていた背景には、こうした現状と問題意識があったと言える。そして、こういった危機意識は講演期間中至る所から聞こえてきたのである。

ある講演会場では、参加者の1人から「子ども



リーダーケルク講演の一場面

はじっと椅子に座っているのではなく、自由に動き回る方が自然ではないか」という意見も聞かれた。この発言の裏には、子どもらしさをもっと尊重したい(逆に言えば、今の教育実践は子どもらしさを大切にしていない)、型に嵌めるのではなく、子どもの個性を伸ばす教育を目指したいという思いが潜んでいるように思われた。

しかし、果たして学力向上と楽しい学びは反するものかどうか。学ぶ楽しさが分かれば、自ずと子どもは学び始める。押し付けられてドリルの反復作業のような学習をさせられては学ぶ意欲も低下するが、学びが楽しいと自覚できれば、そこから学びを展開できる。子どもは本来好奇心を持っており、自ら知りたい、学びたいと考えるものである。それを意識的に伸ばしていけるような教育実践の探求が大切であると、金森は講演で訴えた。

(2) ドキュメンタリーについて

上記のような現状があつて「涙と笑いのハッピークラス」が非常に高く評価されたわけだが、いくつかの会場では、実際に同ドキュメンタリーの一部を視聴し、その場面について質疑応答がされることもあった。その中で、一番多く取り上げられたのが、いわゆる「イカダ事件」であった。これは、ユウトがおしゃべりを授業中やめなかったことでイカダに乗せないと金森が決定したことに対し、ヨウがイカダ作りとおしゃべりを結びつけるのは筋違いだと反論する場面である。あの場面に対し、あれは本気で怒っていたのか、どのような教育的意図を込めていたのかといった質問が出された。それは、教師に向かって必死に子どもたちが仲間を守ろうとしている姿への共感や驚きを多くのオランダ人が抱いていたと同時に、そのような仲間意識を育て、教師にさえ反論できる態度を培った教育方法への関心と、あの場面で教師金森がどのような教育的配慮を持っていたのか指導方針を知りたかったからだろう。

実際に、あの場面で怒ったことは、ユウトの両親からも日頃の行動について相談されていた時期でもあり、意図的になされたことだそう。怒りを教えるのは重要な課題である。しかし、金森としてはヨウに続いてほしいと目をつむった。子ど

もたちが立ち上がるチャンスを与えたかったと言う。人は、追いつめすぎるとつぶれる。しかし、敢えて複数の意見を子どもたちから出させることで、「事件化」された問題に対する子どもたちの当事者意識をより強め、自分たちでどうにか解決しなければいけないという雰囲気を作り出したのであった。そうした教育的意図が込められていた場面だったのである。

次に、「涙と笑いのハッピークラス」でも金森はよく子どもの肩や頭などを触っているが、子どもに接触することへの質問も多く出された。オランダは日頃の挨拶でも自然に抱き合うことが多い。しかし、学校現場では近年教師が子どもに無暗に触ることに抵抗があると言う。教師が子どもに触ることに、保護者も過敏になっているところがあるようである。というのも、以前指導的立場にいた大人が子どもを虐待した事件があり、それ以来、特に男性教師は子どもに触れることが難しくなっているらしい。これは意外だった。このような現状に対し、あるオランダ人は、物事には何にも良い面悪い面があるが、子どもに触れることに関しては悪い面が強調されすぎている、触れ合うことで生み出される良い関係もあるのに、そういう良い面まで否定されてしまっているのは非常に問題だ、と話してくれた。そうした教師の行動に対しても過敏になっている様子から、教育現場にある種の緊張感が広がっている様子が伺えた。

(3) 教育哲学の源泉について

講演の中で多く尋ねられた質問の1つは、金森俊朗が自らの教育観(哲学)をどうやって築き上げたのか、育んだのかという内容であった。実際は様々な表現で質問されている。「教育哲学の源泉は何か」、「教育実践のインスピレーションはどこから得たのか」、「子どもと教育を作り続ける力はどこから来ているのか」、あるいは教育観の宗教的影響やスピリチュアルな面について尋ねる質問も出た。表現は色々あるが、金森は教育哲学なり教育観のヒントを何処から学んだのかという点に集約できるだろう。また、「哲学原理で一番達成されたことは何か」という問いも出ていた。

この質問に対し金森は、自らの教育観及びそれを支える人間観は、生育環境が大きく影響してい

ると語った。少年期の家畜や農作業の手伝いから命の連関を学び、父の仕事ぶりからも多くを学んだと言う。また、思いっきり自然の中で遊んだことが、金森実践の根底にあることも本人から紹介された。他にも、ルソーやペスタロッチから学んだこと、文学をよく読んだこと、大学時代に生活綴方教育を学んだことなども自身の教育哲学を作った要素であるとも語っている。

なお金森教育方法論については、教室によくゲスト(妊婦、末期がん患者など)を招くことについての質問も多く聞かれた。

(4) 現状の教育を良くするための助言

次に多かった質問は、現職教員や現に教育に関わる人たちへの助言だろう。例えば「どうしたらあなたのような教師になれるか」や「明日から教室で何ができるか」といった教師へのアドバイスを求める声が多く聞かれた。つまり、金森のような授業実践をするには、具体的にどうすればいいか、という質問である。

この質問に対し金森は、子どもたちが日々持ってくる「手紙」を読み取れる力、聴く力、仕草や表情、話し方から子どもの気持ちを読み取る力を付けてほしい、日々子どもの声を聴いて受け止めてほしいと答えた。

オランダの学校には規制やメソッドがあるが、金森実践をどうしたら導入できるか、という質問も出された。この質問の主旨は恐らく、オランダの学校は政府からの規制や各学校が導入している教育方法(プラン)があるため、独自の教育スタイルを導入しにくいという意見であろう。しかしこれに対して金森はオランダの方が日本よりも自由であり、教育内容や方法を新たに導入できる可能性はたくさんある、実際に子どもと教育を築き上げていくことが大事であると語った。

別の人からは、教育要求のプレッシャーや既に教育目標がある中で、子どもの成長にどう迫れるかという質問が出ていた。あるいは、政府の要求に対して、すなわち学力向上を求められることに対して教師はどう対処すればいいか、金森実践と学力向上は両立するかという内容の質問は、どの会場からもよく聞こえてきた。また、こういった質問と関連して、あなたは日本の教育界において

特別な存在か、それとも普通か、という問いかけも非常に多く耳にした。

ある保護者からは「親としてどう学校教育に影響に与えられるか」という問いかけも聞かれた。金森は、子どもたちと作り上げた事実こそ教育実践の大きな成果であり、魅力ある深い学びが感動を生み、同僚や親を変えていくと回答している。

たとえ1人でも面白いと思ったら新しい試み始めてみるのが大切で、子どもと楽しい学びを作り上げていけば仲間は増え保護者も応援してくれるようになるとも語っている。実際、金森のクラスには他の教師や保護者たちがよく授業を見に来ていた。だから、保護者も自分の要求通りに学校教育や子どもの成長を変えようとするならば、そういった考えは今すぐやめた方がいい、教師と一緒に子どもたちの輝く教育実践を作っていくってほしいと答え、子ども同士が競争するのではなく、互いに学びあって豊かな学びを追求することの大切さを訴えた。

印象的だったのは、講演初日の夜に行われた会場(アイントホーフエン)でマイクを聴衆に渡す係をしていた少年が、自ら最後に質問した場面だ。彼は聴衆の中に自分の担任がいることを紹介した後、「自分がこれからの1年を良い年にするために、何をすればいいのか」と質問したのだった²。少年(まだ10代前半のように見えた)自ら質問したということは、自分の役割をこなしながらも金森の講演に耳を傾け、自分の問題として教室を良い空間にしようと考えたということである。その子どもの心にもしっかりと金森の訴えは届いていたということになる。金森は少年に対し「もうしているではないか。自分の担任を今紹介してくれた。思っていることや自分のことをちゃんと語っているではないか。それに今、オランダと日本の橋渡しをしている。教室でも自分を語り、人と人をつなげていってほしい」と語りかけた。

(5) その他

最後に、上記以外で出された質問項目を列挙しておく。

聴衆からたびたび訊かれた質問として、子どもたちがその後も話に来ることはあるか、その後子どもたちはどうなったかと、ドキュメンタリーに

出ていた子どものその後の成長に関心を示した問いが目立った。あのような「命の授業」を経験した子どもたちがどう成長したのか、教育の影響力や可能性を知りたい思いから尋ねてきたと思われる。

子どもはあなたから何を引き出したか、という質問もあった。教育は教師が子どもの力を引き出すことと考えがちだが、子どもたちから多くを学んだことが教師の豊かな感情、様々な教育内容や方法を生み出したことに目を向けさせるいい質問だったと言える。

教師の仕事と家庭の教育の線引きは何処ですればいいのか、という質問も出た。教師が家庭の問題に何処まで踏み込んでいいのか、とも言い換えられる。あるいは、後述するように教師のワークシェアリングが進んでいるオランダでは、必要以上に子どもの教育問題に踏み込みたくないという考えもあるのかもしれない。これに対し金森は、線引きはできない、子どもは既に何処まで教師が踏み込んでいいのかを心の内で決めている。全力で子どもに向き合えば、学校と家庭のつながりは自然にできていく。最初から仕事内容を線引きして垣根を作る人間を子どもは信用しないので、全力で人間を信頼して対処してほしいと回答した。

その他、ユニークな質問としては、学校の内装外装業に関わる人から、内装外装はどういう点に注意すればいいかという質問や、中等学校になると教科ごとに担任が分かれるが子どもにどう接すればいいか、と尋ねる声もあった。金森は前者に対しては、子どもが快適に過ごせるように、子どもたちの好奇心を高められるような工夫があるといいと回答し、後者に対しては学問の面白さ、深さを教えるといいのでは、と答えている。

以上、講演中に出た質問を分類しその意図などを考察してきた。講演に参加したオランダ人は「涙と笑いのハッピークラス」の中で展開された楽しい学び、命や人間の尊厳を扱った教育、教師と子どもが信頼関係で結ばれていて子ども1人1人が輝いている様子に強く惹かれ、金森実践から多くを学びたい、オランダの学校にも彼の哲学や方法を導入したいという思いから、多様な質問を金森に投げかけたことが分かる。

4. オランダでの「いのちの授業」(金森)



アムステルダムの新聞Het Paroolに掲載された記事

(1) 授業の概要

子ども・学生に3回、教師・保護者・教師を指す学生に1回、いわゆる「飛び込み授業」を行った。以下は、9月7日(金)アムステルフェーン・カレッジで二回目に実施した授業の骨子である。授業テーマ「この手が拓く世界の魅力」

1. 黒板に右手と腕、左手と腕の略図を書く
2. 「右」と「左」の一画目と二画目の書く順番と長さを正確に書き、この違いは大切であるが、日本の学校ではその違いがどこから生まれてきたのかを説明せずに覚えなさいと練習させる。
3. 1に描いた略図を使って意味を説明。日本で使用されている基本的な漢字は物の形からできていることを説明。
ここまでとても興味深く真剣に聞いている。
4. 前席にいた男子生徒に前に出してもらい、筆者は腰に手を当て、「痛い、痛い」と叫んで、空いた椅子に座り、手を彼に差し出す。彼は、私の手を握り、引いて共に歩く。次に、筆者が目を両手で覆い泣くゼスチャーをオーバー気味に演ずると彼は筆者の肩に手を置き、励ましのゼスチャーをする。
5. 「この様子、二人の関係はどんなことを表しているのだろうか」と問う。
「友情」「愛情」「励まし」「温かさ」などが次々に発表される。
6. それを文字に書き表すと、と言って、左手と腕、右手と腕を組み合わせた略図を書く。その横に「友」と書き、friendと言うと、「おおっ！」

と声上がる。

7. 「この手はたくさんことができる。どんなことができるか？」と問う。

「楽器を弾く」「料理をする」「物を作る」「文字を書く」と次々に答える。

8. 「この手は素晴らしいことができる、家族や友の手で素晴らしいことをしてもらってきた。」

そのドラマを思い起こして欲しい、と筆者の学級の子が書いた作文を紹介。「この手が生み出したことは?」「文字をかくことと恋が生まれた」

9. 手を挙げた二人の男女学生を、前に招いて発表してもらおう。筆者は発表している彼等の背中を温かく抱くように手を掛けている。

彼女は、父の死の際、母が手を握って支えてくれたことを、彼は、友人が父を亡くし悲しんでいるとき、手を握って励ましたことを語った。

10. 2枚の写真を使ってまとめ。①満面の笑みの赤ちゃんの写真。手の指がわずかに見える。「この子が笑顔なのは?」「親にしっかりと抱かれているから」「その通り」と言って抱きかかえている手と腕がしっかりと見える写真②を見せた。

「この赤ん坊は、私たちでもあるのです。また、抱きかかえている人でもあるのです。今、生きている人の手だけでなく、この国の大地を作ってきた歴史的な手でもあるのです。誰かに、誰かを、抱きかかえられ、抱いて支えていることを忘れないで下さい」と締めくくる。

(以上を50分程度、後15分程度質問に答える。一回目の授業では、7番の所で折鶴を見せ、佐々木貞子と「原爆の子の像」の建立に力を尽くした日本の子どもたちのことを語る。)

(2) 授業の反応

9番での発表、すなわち、自分史と向き合い、見つめ、典型的なドラマを集団の前で語ることが果たして可能なのか。授業のクライマックスにあたる重要段階である。日本において、基本的には同質の授業を、小学生～大学生、保育士・教師・市民にかなり丁寧に実施してきたが、進んでの発表は容易ではなかった。小学校教員38年間とその後5年間に渡る「飛び込み授業」の理念と技術を結集して授業に臨んだ。

ところが、オランダでの4回の授業では、生徒

も市民も素早く発表者が挙手し、大変重い内容を進んで語ったことに筆者自身が驚いた。彼等が己の内面世界を学校で心拓いて語ることはこの時が初めてだったという(下記引用文棒線①)。と言うことは、他者に(を)支えられ(支えて)生きているという関係性の認識が日本よりは育っていると考えられる。

以上の授業の様子は、Het Parool紙、PS Kind(首都アムステルダムを中心に発行されている新聞。PS Kindは、子どもや教育をテーマとした記事がまとめられている週刊冊子。毎週一回、火曜日発行)に、2012年9月11日(火曜日)付けで一頁全面に報道された。以下、長くなるが資料的価値が大きいので必要な部分を紹介する(翻訳はマコ・武田・ファン・デル・ハムさんをお願いした)。

見出し: "心で学ばなければならない"

小見出し①教育に携わる多くの人にとって偉大なモデルとされている日本の教育者、金森俊朗先生が先週アムステルフェーンにお見えになりました。小見出し②著名な日本の教育者、金森俊朗先生が先週金曜日、アムステルフェーン・カレッジにて授業を行いました。

記事:HAVOコース³の3年生、カリエン・スヌーイさんは、数人の友人と一緒に金森先生の授業を受け、こう話してくれました。「金森先生のそばでは、まるで何でも話せるような気がしました。先生は、とてもオープンで、自らのことも話してくれました。普通の授業ではそんなことはありません。普通は、私はばかみたいなりアクションを受けるのが怖くて、自分の気持ちなんかは言えないことが多いんです。」①

金森先生は、自らの教授法を教育関係者に伝えるため、過密スケジュールでオランダに滞在しており、今回のアムステルフェーン・カレッジでの講演はその一環でした。

金森先生の教授法は、2003年、一年間の撮影期間の後に作成されたドキュメンタリー「Children Full of Life」によって広く知られるようになりました。金森先生は、いのちの大切さを伝えることを自らの使命だと考えています。また、金森先生は、生徒らに自分の気持ちなどを書いた手紙な

どを持ち寄せ、学校の外での経験や、それらに関する彼らの感情を表現するように促します。最初は自らの殻にこもりがちだった子ども達も、だんだんと自らを表現できるようになり、徐々にお互いのことを思いやれるようになるのです。このドキュメンタリー映画によって、オランダにも多くの金森ファンができました。

アムステルフェーン・カレッジにおいて、金森先生は、思春期の青年らで満席の2つのクラスに対しての授業を行いました。金森先生は友情、そしてお互いを思いやることの大切さについて語ってくださいました。先生は、まず、漢字の「友」という字は「右」という字と「左」という字が一緒になってできているのだ、という説明から始めました。そして、この「右」という字と「左」という字は、それぞれ右手と左手のかたちから生まれたのだという話をなされたのです。子ども達はすっかり先生の話に聞き惚れていました。「手が、一体どんなことをできるのか考えてみてください。」と、金森先生は、生徒たちに続けました。

金森先生が生徒たちに手の可能性について問っている間も、先生の身ぶりや表情は変化し続けています。授業を、身体全体で行っているのです。

彼は、黒板に絵をかき、待ち、笑い、そして顔をしかめます。生徒たちが実例をあげて答えました。金森先生は満足したようにうなずきました。「そうですね。手は、人を慰めたり、音楽を奏でたり、ご飯を食べたり、手を振ったり、本当にいろいろなことができますね。そして、書くことで、手は心にあることを伝えることもできます。」

続いて金森先生は、笑っている赤ちゃんの写真を見せました。赤ちゃんの顔は、喜びに満ち満ちています。なぜ、この赤ちゃんはこんなにも幸せなのでしょう?そして、二枚目の写真を取り出しました。なぜなら、この赤ちゃんは誰かの二本の手で抱きかかえられていて、自らの手もその人に向かって差し出しているからです。

次に、金森先生は生徒たちに、家族や友人の手が彼らにとってどういう意味を持っているか、を聞きました。「しっかりと考えてくださいね。何も思い浮かばないということは、あなた達がこれまで一人で大きくなってきたということになってしまいますよ。」

長い黒髪の少女が前に出て、自分の父親の死について話しました。彼女のお父さんが亡くなった時、彼女の手を取り、慰めてくれたのはお母さんの手でした。その後、一人の少年が続きました。金森先生は、話をする二人の肩に手を置いて聞いていました。少年は、金森先生より頭一つ分は背が高かったので、クラス中に笑いが巻き起こりました。

アムステルフェーン・カレッジでの授業が終わると、今度は質疑応答の時間となりました。(後略)

授業を実施(午前中)した夜、保護者・教職員を対象に講演が開催された。途中、授業に参加していた生徒3人から感想が発表された。彼等がどのように受け止めたか、大変興味深い資料である。一人の女生徒の感想である(翻訳はインゲボルグ・ハンセンさんに依頼した)。

こんにちは

今日、金森先生の授業に参加することができました。その経験をみなさんに話したいと思います。

教室に入った時の先生はなんか落ち着いた様子で、その姿を見ただけで感動しました。教室が金森先生でいっぱいになった感じがしました。先生の身長は結構低かったが、なかなか無視できない方でした。先生はまだなにもしないで、そこに立つだけで私たちは先生に関心を向けました。

話している時の先生の手と腕の大きな動きのおかげで、通訳がいなくても日本語で語っていることのほとんどは解ったような気がしました。私たちに質問したり、手伝ってもらったりしましたので、授業を聞くだけでなく、本当に参加していた感じでした。先生が真剣に私たちに興味を持って、学級のどの人も大事という気持ちが伝わりました。先生が私たち一人一人を「見ていました」。②

先生の教え方を、実際に経験できてとても良かったです。とても気に入りました。たとえば、先生が「何でも上手にできなくてもいいです。試すことが大事です。単にやってみればいいし、完璧にできなくてもいい」と言ってくれました。

私の学校の先生が「先生って子どもから学ぶことはできますか?」と聞いたら、金森先生が「子

どもたちから沢山のことを学んで、それをまた授業で使います」と答えました。学級の子が自分で何かを発見し、学んで、自分なりに他の子に教えたり、他の子を手伝ったりすると先生がそれをとて誇りに思っているそうです。学ぶことは一方通行でなく、お互いに学びあうことができるということです。③

愛されていることはとても大事なのに、それが「普通」「当然」になってしまって、愛されていることの大切さに気付かないようになってきているんじゃないかと先生は言いました。その言葉が一番よかったです。④ 愛することは大切です。愛がなければ、だれも生きることができません。愛というのは小さいことにも表現されます。皿洗いの手伝い、だれかをハグかキスをする。お互いかわり合うことが大事です。

「命は一つしかないので、頑張らなければならない」と言われて、毎日毎日周りにいる人にどれだけ愛をもらっているかに気付きました。金森先生のおかげでそれを意識することができ、うれしく、感謝しています。ありがとう!

ルイイエ・ヤロ

彼女は感想を発表すると、ハグを求め、筆者に抱きつき踊りながら回転し、大きな喜びを表した。

②③の捉えはとても的確で、しかも日本での高校生と大学生に授業した際にも多く出される感想である。主体的に、学びを仲間・教師共に創る願いを思春期の子ども(青年)達は、国を超えて共通に持っていると考えられる。

④に見られるように、短時間の授業にも拘わらず、筆者が意図した学びの本質を見事にまとめていることにも驚いた。時間外長時間労働が無いオランダでは家族と共に過ごすことが大切にされていると言う。その内的条件が、本質を的確に浮き彫りにしたのだろうと考えている。

5. オランダ学校教育の現状(辻)

オランダは4歳から順次学校へ入学できる。4歳になったら一斉に入学するのではなく、いつから学校に通い始めるかは保護者が決める。12歳までの8年間は初等教育機関に当たる。ただし、

学業の進度が遅れているなどの理由で、留年を子ども自ら選択することができる。中等学校へ進学する際に、オランダの子どもたちは選択を迫られる。オランダの中等学校は4年制、5年制、6年制の3種類に分かれている。この違いは、卒業後の進路に影響する。この12歳で子どもの進路が決定してしまうことが、初等教育に競争原理が導入される要因ともなっている。将来大学に進学したい場合は、中等学校で6年制の学校に進学しなければならない。4年制や5年制の中等学校から大学へは進学できないのである。もし4年制中等学校へ進学したら、中等ないし高等レベルの職業実務教育に進学するしかない。初等教育から中等教育に進学する際、どの学校に進学できるかは、小学校卒業時に実施されるCITOテストの点数と日頃の成績によって決まってくる。CITOテストの点数が高ければ保護者への印象も良くなり、入学者も増えるという傾向がある。

日本と比べるとオランダの学校は極めて自由度が高い。子どもが授業を選択したり、時間割を自分の判断で決められたりする学校も多い。初等教育段階にはシュタイナー教育、モンテッソーリ教育、ダルトン・プラン、イエナ・プラン、フレネ教育といった独自の教育方法論に基づいてカリキュラムが作られている学校も多数存在し、宗教教育を中心に行う学校も存在している。学区制はないため、保護者は我が子をどの学校に通わすか早い段階から情報を集め始める。人気のある学校は入学予定の数年前から予約をするケースもあると言う。近年はこうした教育方法や宗教で学校を選ぶよりも、テストや進学実績で選択する保護者も増えている。

教師もパートタイムが多い。オランダはワークシェアリングが進んだ国で、教師も同様にフレキシブルな就業形態を導入していることがある。視察したある学校では、一人の担任でクラスを受け持つのでなく、曜日によって担任が変わることもあった。教師にとっても、日本と比べたら拘束時間の短さや仕事量など自由度が高い。圧倒的に女性であることも大きな特徴である。男性教員が少ない点を問題にしている声も実際現地で聞かれた。

教師には1時間の昼休みが保障されているという点も、給食指導をしなければならない日本の教

師とは大きな違いである。

6. 現地で報道された内容(辻)

今回の講演に関しては、地元の新聞紙や各種団体のホームページ等でも数多く報道されている。

現段階で手元に集まった分から、講演内容及び聴衆の反応をよく表した記事2つについて紹介しよう。なおオランダ語記事を翻訳してくれたマコ・武田・ファン・デル・ハムさんに感謝の意を表する。

2012年9月12日(水曜日)

Linburgse Dagblad(オランダ南部、リンブルグ州の新聞)

すべての子どもがハッピーに

日本のカリスマ的教育指導者金森俊朗先生が、月曜日の夜、ルールモンドのオランジェリーにていのちの授業の講演を行い、リンブルグ州全土から350名ほどの教師たちが集まりました。「学校とは、単に計算や国語を学ぶところではなく、人生を学ぶところだ。」

(中略)

教師であり、また、哲学者、教育学者でもある金森俊朗先生のクラスを追ったドキュメンタリー映画「Children full of life」。その中で一番印象的なシーンに、10歳の子ども達が皆でいかだを作成する場面がある。子ども達は、何か月もかけて材料を集め、いかだを作成してきたのだ。しかし、いよいよいかだを水に浮かべるその日の朝、金森先生はユウトにいかだに乗ることを禁止した。彼は、先生の度重なる注意も聞かず、おしゃべりを続けていたのだ。クラスメートのヨウが彼をかばった。「ユウトは僕たちのチームの一員だから。どうか彼にチャンスをあげてください。」金森先生は、目を閉じて、沈黙した。ヨウは、落ち着いてこう続けた。「いかだ作りは先生ではなくて、僕たちのプロジェクトだから。僕たちは一生懸命働いたけど、先生は何もしなかったじゃないか。みんなもそう思いませんか?」クラスメート達は、ヨウの意見を支持し、ユウトはイカダに乗ることを許された。

「私は本当に怒っていたのですよ」と、金森先生

はオランジェリーの満員の観客に伝えた。「あの日、ユウトは本当にお行儀が悪かったのですから。でも、子ども達の話聞きながら、子ども達が正しい、と思いました。私の負けですね。プライドなんかかなぐり捨てて、謝らなきゃ。心から子ども達に謝ることでしょ。そんなに難しいことはありません。子ども達の言っていることをよく聞くことです。」ヨウとユウトは、こうして友人関係を築いた。

(中略)

教育学教授の金森先生は、一週間半にわたってオランダ各地で講演会を行っています。どこへ行っても、満員の観客の興味を引くのは、彼の「子どもを見つめるまなざし」です。彼は、子どもは子どもらしくなければならぬ、と訴えます。もちろん一緒に楽しいこともするけれど、時には共に泣いたり、慰めあったりすることも必要だ、と。

日本からやってきたこの小柄な先生は、大きなジェスチャーを交えながらステージを歩き回ります。(中略)「教室では、先生がピッチャーで子ども達に指示を出したりすることが多いですね。その場合、子ども達がキャッチャーです。でも、私は逆だと思います。子ども達が投げた球も、それがどんな球であろうと我々が受け止めてあげなければ。一方通行ではダメなのです。」

子ども達は、自分の食べているものがどこから来ているかをよく知って、そして、よく食べなければいけません。そのため、金森先生は子ども達と野外に出て、一緒に米や野菜を作ります。「私たちの命は、土によって生かされているのです。」そして、懇願するように、ゆっくりと話します。「子ども達を保護者の期待から解き放ってあげることです。」観客席から拍手が沸き起こりました。

金森先生は、子ども達のからだ全体から発される声に注意します。こうすることによって、彼らのことを理解できるからです。そして、子ども達のいう事を「ふむ、ふむ、ふむ」と聞いているだけでは、教師としてはダメなのです。一週間半にわたるオランダ滞在期間中、彼はいくつかのオランダの学校を訪れました。そこで彼は、多くの先生たちが「ふむ、ふむ、ふむ」と子ども達のいう事を聞いているのを見ました。「つまらない!」、と彼は言います。では、どうすればよいのでしょ

う? 「子どもが私に何かを伝える時には、私は教室内を歩き回って、他の子ども達にもその子が言いたいことが聞こえるように工夫します。そうすることによって、他の子ども達も参加することができるわけですね。そうして、つながりが生まれるわけです。」そして、笑いながら続けます。「もしくは、私は話しているその子の頭を回して、クラス中の皆に目が行くようにします。そうすることによって、皆が聞きたがっているのだよ、ということを示そうとします。」

2012年9月12日(水曜日)

リンブルグ州の新聞記事だと思われるが、どこの新聞社のものか不明。こちらの記事には、講演を聴いた聴衆の反応がまとめられている。

「こうでなくっちゃ!」。リカ・フェルフフ(Rika Verhoef)さんは、金森先生の講演に感銘を受け興奮気味にこう語りました。彼女はシットルド(地名:Sittard)で教育学の修士課程を担当しています。「彼の出発点は子どもなのです。当たり前聞こえるでしょうが、これは、実は非常に忘れられがちなことなのです。子どもの就学義務年齢が4歳に引き下げられる計画があると聞きました。なぜかという、そのほうが、経済効果があるから」、だそうなのです。子どものため、ではなく、経済のため。私が言いたいのは、そういうことなのです。」

(中略)

ランドグラーフ(地名:Landgraaf)にて、問題行動のある子どもたち、勉強において問題を抱える子ども達のための診療所を開いているエレン・エフェルツ(Ellen Everts)さんも講演会に来ていました。彼女は、カディール・エン・ケール(地名:Cadier en Keer)のSOVSO Sint Jozefという学校で授業も受け持っています(この学校については名前以外の情報がなく、小学校なのか、中学校なのか不明)。彼女が一番共感を覚えたのは、金森先生が語った「子どものストレスを取り除いてあげなければならない」という話です。「昔、行動障害のある子ども達のための学校で働いていた時のことです。私は、子ども達と一緒にこども牧場へ行きたいと思いました。’あんなし

つけの難しい子ども達と一緒に、ですって?’他の同僚たちはみな、私の気がおかしくなったのだと思いました。

でも、私は行くことに決め、そして、子ども達は本当に喜んでくれました。ADHDの、一番落ち着きのない子どもが、牛の隣では落ち着いていたのですから!」

また、彼女は、こんな話も聞きました。ある先生が、一人の生徒にCITOテストを4回も受けさせたのだそうです。「ある日の午前中に、立て続けに4回ですよ!この子はもっとできるはずだから、とその先生は言っているそうですよ。この子どもは怒って、先生に暴言を吐いたのだそうです。無理もないと思いませんか?」

フェンレイ(地名:Venrey)のGilde職業訓練校にて授業を担当しているトゥルース・ゲウテルス(Truus Geurts)さんとアンジェリーク・フェルストラテン(Angelique Verstraaten)の二人は、金森先生のドキュメンタリーを見たことはありません。金森先生のことをまったく知らず、言ってみれば、「白紙」の状態でルールモンドの講演会に参加したわけです。「人間の幸福ということが失われつつあるということは、確かにあると思います。」と、トゥルースさんは認めます。アンジェリークさんは、「私も、普段は、あまりシステムにとらわれないように心掛けています。流れに逆らっていますね。でも、それでもいいのだ、そのほうが子どもにとっていいのだ、と認められたように感じて、嬉しいです。」

まとめ(辻)

今回金森を呼んだNIVOZにしても講演会に参加したオランダ人にも共通して言えることは、「涙と笑いのハッピークラス」を高く評価しているという点である。どのような点に彼らが共感し、わざわざオランダにまで金森を呼んで学ぼうとしているのか、最後にまとめておく。

ある講演で与えられていたテーマは「いかにして教育学を実際の教室に取り戻せるか」だった。実際にオランダへ行くまでは、既にオランダの学校にはイエナやダルトンなど独自の教育方法が導入されているのではないかと考え、質問の意図が分からなかった。しかし、今回訪問して分かったこ

とは、学力向上が叫ばれるようになって、そうした様々なプラン(方法)さえもないがしろにされて、単なる形式的な学習スタイルが横行するようになってきている現状があり、そのような変化に危機感を多くの教育関係者が抱いていたということだった。すなわち、教育学(教育哲学、教育理念とも言い換えられる)が欠如し始めていることを憂いた人たちが今回金森から学び取ろうとしていたことが見えてきた。また、子どもたちはもっと学びを楽しくしたい、もっと先生に授業を楽しくしてほしい、いじめられないでもっともっと仲良くしたいと強烈に思っていることが分かった。

今回の訪問では実際の学校の様子は短時間でしか見るができなかった。教師の仕事の様子も部分的にしか観察できていない。今後の課題として、実際に子どもたちは学校でどう過ごしているのか、もう少し長い時間観察してみたい。また、教師がどのような実践を実際に行おうとしているのか、その取り組みの様子も見てみたい。それに、今まで日本で高く評価されてきたオランダ学校教育だが、実際にその教育を受けてきた人たちがどう自らの教育経験を考えているのか、生の声を聴いてみたいと思う。

<注>

- 1 リヒテルズ直子、尾木直樹『いま「開国」の時、ニッポンの教育』(ほんの木、2009年)、リヒテルズ直子『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』(平凡社、2006年)など。テレビでもNHKが2012年3月8日に放映された番組『地球イチバン』では、「地球イチバン子どもにやさしい教育」をする国としてオランダを紹介した。番組内でも、オランダの子どもたちは教育満足度世界一と紹介されている。これらの文献や映像から、日本ではオランダの学校教育が高く評価されていることが分かる。
- 2 オランダは9月から新年度が始まる。つまり講演当日は、新年度初日だった。
- 3 HAVOとはhet hoger algemeen voortgezet onderwijsの略で、5年制の中等教育機関を指す。